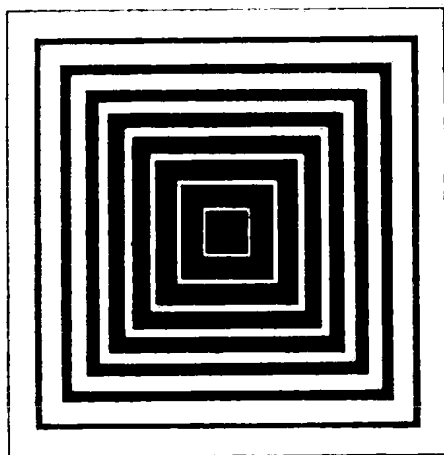


10



古今和歌集 新古今和歌集

窪田空穂・窪田章一郎 訳他



日本の古典—10

河出書房新社

日本の古典 10

古今和歌集
新古今和歌集

昭和四十七年一月十日 初版印刷

昭和四十七年一月二十四日 初版発行

訳者 窪田空穂他

装幀者 亀倉雄策

発行者 中島隆之

発行所 株式会社河出書房新社

東京都千代田区神田小川町三丁目六番地

電話 東京(202)三七一一(大代表) 振替 東京一〇八〇二

印刷 凸版印刷株式会社

製本 加藤製本株式会社

製函 加藤製函印刷株式会社

本文用紙 本州製紙株式会社

クロス 日本クロス工業株式会社

定価 一二〇〇円

©1972



福島県・安積沼（古今集 677 番ほか）

目次 古今和歌集・新古今和歌集

古今和歌集(全).....	窪田 空穂訳	一九
新古今和歌集(全).....	窪田章一郎訳	二七
玉葉和歌集.....	池田弥三郎訳	三六五
風雅和歌集.....		
〈作品鑑賞のための古典〉		
藤原定家.....	久松 潜一訳	三九五
近代秀歌.....		
荷田在清.....		
国歌八論.....	窪田章一郎訳	四〇二
解説.....	大岡 信	三
解題.....	窪田章一郎	四三
作者略伝.....	窪田章一郎	四一五
初句索引.....		四五二
挿画.....	高山 辰雄	
新古今和歌集.....	加山 又造	
解説写真.....	榑原 和夫	

言語空間の輝き

私は敗戦直後の昭和二十二年に旧制高校に入學した。寮に入って三年を過ぎた。戦後の最も甚だしい欠乏時代である。本の出版点数は少なく、今なら簡単に手に入る類の本も、入手はむづかしかった。そのため、私は国語の授業で万葉集を読むことになったとき、父親の蔵書から万葉集のテキストとして岩波文庫の古い教科書版をもちだし、ついでに新古今集をもちだして寮の机の上に置くことにしたのだ。今、万葉集への書きこみの数々を眺めると、種種のことを思い出す。けれども、何といっても私に強い思い出となって生きているのは、参考書も何もなしに、ただこの一冊の本だけを頼りに、腰掛け代りの万年ベッドの上で読んだ新古今集である。

山ふかみ春とも知らぬ松の戸にたええかかる雪の玉
水 式子内親王

みしま江や霜もまだひぬ蘆の葉につのぐむほどの春風
ぞ吹く 左衛門督通光

見わたせば山もとかすむ水無瀬川夕べは秋となにおも
ひけむ 太上天皇（後鳥羽院）

「春歌上」のはじめの方の歌の中で、私はまずこれらの歌に目をとめ、歌の頭に鉛筆でレ印をつけている。「たええかかる雪の玉水」とか「つのぐむほどの春風ぞ吹く」といった表現の繊細で捕捉しがたい優艶さに心ひかれたので

あることはいうまでもない。それらは、万葉集——これは私にとってやはり大きな発見だったが、教室で教わっているというその分だけ、ひとりだけの歓びの度合が減じていたように思う——の歌の世界とは非常にちがった世界のあつたことを暗示しているように思われた。今ならそれを、たとえば言語そのものの構築する自律的な美感の世界とか、その他、さまざま言い方で説明しようと試みるところだろうが——しかしそういう説明はしばしば説明だけのものにとどまる——当時はひたすら心を妖しくゆきぶられるその秘かな魅力におどろいたのだ。

そして、今引いたような歌につづいて、新古今集春歌上のはじめの方に、たちまち私は次の歌を見出すことになった。

春の夜の夢のうき橋とだえして峯にわかるるよこぐもの空
藤原定家朝臣



奈良県・長谷寺の梅。
紀實之が長谷寺に参詣したおり、「人はいさ心もしらずふるさは花ぞむかしの香にほひける」と詠んだことに因んで植えられたもの（古今集四二）。

長谷寺は、初瀬寺とも呼ばれ、都からよく貴族が「はつせ詣で」にきた。

定家朝臣「年も経ぬいのるちぎりははつせ山尾の上の鐘のよそのゆふぐれ」（新古今集一一四二）。



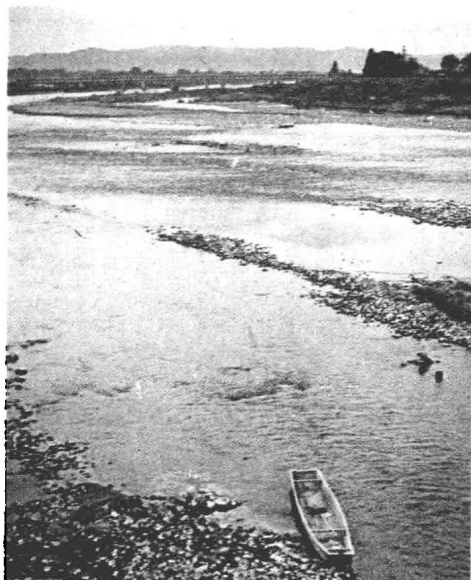
宮城県・塩釜の浦。
紫式部「見し人の煙と
なりし夕よりなぞむつ
まじき塩がまのうら」
(新古今集八二〇)。

下は同県・名取川。
忠岑「みちのくにあり
といふなるなとり川な
き名とりでは苦しかり
けり」(古今集六二
八)、摂政太政大臣
「歎かずよいまはた同
じなとり河せぜの埋れ
木くちはてぬとも」
(新古今集一一一九)。

この歌は——もう何度か書いたことだが——私にとつて、いわば新古今集全体を一挙に開いてみせてくれた鍵だった。いや、そういうことは言う必要もないことで、ただ私はこの歌に夢中にさせられたというべきだろう。

私は高等学校では文科内類という科にいた。その科はフランス語を第一外国語とするところである。もとより私はフランス文学に憧れをもっていて、ボードレールやランボオをとにかくフランス語で読めるようになるということに、恐ろしく大きな期待や希望をもっていたにちがいない。新古今集にぶつかったころには、たまたま手に入ったグールモンの類唐的な詩集『手すきび』^{グールモンはフランス語}をくりかえし愛読していたことをはっきり思い出す。そういうフランス文学崇拜者の、自分ではもう充分大人になったつもりでいた十七歳の少年が、こういう中世和歌にいかれてしまった場合、内面世界でのある種の混乱は避けられない。それは、

「いくらボードレールを読んだところで、こういう歌が前人未踏にわかつてしまったようには、深くわかりやしないのではないか」という恐ろしく生意気な疑惑の種子を私の中にまいたように思われる。滑稽なことに、私は当時、この定家の歌が、古来新古今を代表する名歌とされてきたものであることなど、まったく知らなかったのである。もしそれを知っていたら、あれほどに深く感動したかどうか、わかったものではない。私もまた、おれだけが世界の最も奥深い律動を感じできる人間なのだという、青年の、もとより確かな根拠などない傲慢な自信を食って生きている一人にほかならなかつたからだ。定家はそれ以後、私の秘かな祭壇の神になった。そしてその祭壇に、巫女として仕えるのが、式子内親王と俊成女の二人の女歌人だった。今、当時私がつけたレ印のある歌を、春の歌の部から引いてみるなら——



大空は梅のにはひにかすみつくもりもはてぬ春の夜の月

藤原定家

梅の花にはひをうつす袖のうへに軒漏る月のかげぞあらそふ

藤原定家

梅が香にむかしをとへば春の月こたへぬかげぞ袖にうつれる

藤原家隆

霜まよふ空にしをれし雁^かがねのかへるつばさに春雨ぞ降る

藤原定家

青柳のいとに玉ぬく白つゆの知らずいく世の春か経ぬらむ

藤原有家

薄く濃き野辺のみどりの若草にあとまで見ゆる雪のむらぎえ

宮内卿

よし野山さくらが枝に雪散りて花おそげなる年にもあるかな

西行法師

岩根ふみかきなる山を分けすて花もいくへのあととしら雲

藤原雅経

はかなくて過ぎにしかたを数ふれば花に物思ふ春ぞ経にける

式子内親王

風かよふ寐ざめの袖の花の香にかをるまぐらの春の夜の夢

俊成女

花は散りその色となくながむればむなしき空にはさめぞ降る

式子内親王

長くなるので引用はこの程度にとどめるが、私が今これらを眺めてみて思うことは、仮に今始めて新古今集をひもといたとしても、私がレ印をつけるであろう歌は、右のような選択とそれほど違わないのではないかということである。それに、もうひとつ付け加えれば、右の歌群は、ほとんどのものが、新古今集中の有名な歌であり、その点では、私がひとり力こぶを入れて、おれだけがこの歌のよさ

宮城県・多賀城にある「末の松山」の碑。

「君をおきてあだし心をわが持たばすゑのまつ山浪もこえなん」

(古今集一〇九三)と詠まれ、古来歌枕として有名な末の松山は、

じつは所在不明で、諸説あるが、この多賀城説が最も有力であると

いわれる。

福島県・阿武隈川。

「あふくま」の「あふ」に「逢ふ」を掛けて、

しばしば詠まれた。

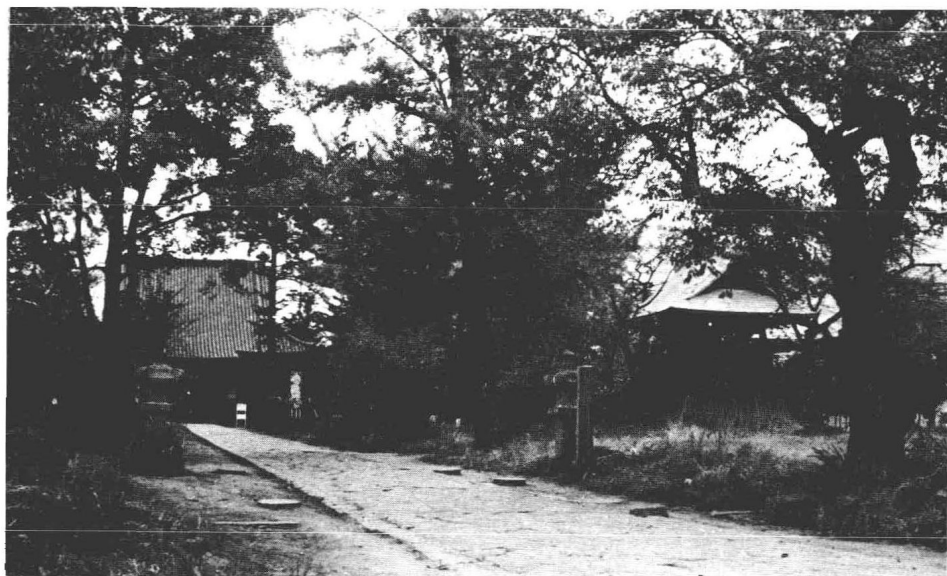
家隆朝臣「君がよにあふくま川の埋れ木も水の下に春をまちけり」。

(新古今集一五七七)。

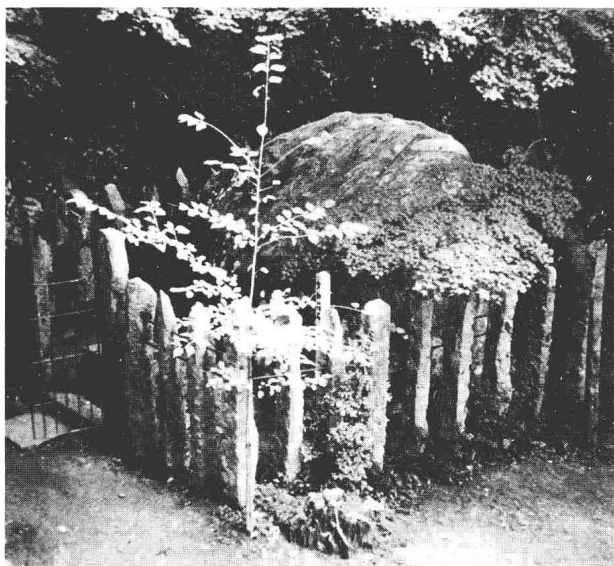
はわかっているのだ、と思っていた選択上の独創性などというものは、そこにはまるでないといってもいいところである。現代の青年がおのれ自身の判定によってよいと感じたものは、古人もまたよしとしたものにほかならなかった。ということ、よい歌には何か独特の景気がそなわっている、ほんの駆け出しの読者をもあやまたずにくらめるとる魅力をそなえているということでもあろう。

ただ私が、やはり言っておきたいと思うことは、当時の私の関心が、何よりもまずフランスの詩、とりわけ象徴詩に向かっていたのであって、決して日本の古典文学に一途に思いを凝らしていたわけではないことである。私はむしろ、その当時の一般的な風潮の影響もあったにちがいないが、日本的なものの一切に対して警戒的だったように思う。そういう状態にある青年の眼に、にもかかわらず、新古今の歌の数々は、深い魅力をもって迫ってくる力をもっていた。そのことの不思議さと思う。私が、新古今集（また古今集）との出会いを、かなり特殊で個人的で偶然的ともいえる経験と思っているのは、そういう私一個の事情に基づいている。

私としては、この思い出に、さらに一、二のことを付け加えておくべきだろう。その一つは、やはり同じ時期に、私が窪田空穂の『和泉式部』という本を読んで、まさに果然とするほどの感動を受けたことである。この本は空穂が昭和十八年に刊行した『中世和歌研究』の中に収められていた「歌人和泉式部」の章を独立させ、創元社百花文庫の一冊として昭和二十二年に刊行したもので、まことにお粗末な仙花紙に印刷された九十ページほどの小冊子だった。私は和泉式部の歌の難解さに驚いたが——和泉式部の難解さは、彼女がいわば、古今集仮名序で紀貫之が在原業平を



仙台市の東方にある薬師堂。陸奥国分寺跡に建てられたもの。この付近一帯を宮城野といい、歌枕として有名。「みさぶらひみかさ」と申せ宮城野の木の下露は雨にまされり」（古今集一〇九一）。



評していった言葉、「ころあまりてことばたらず」のびたりあてはまるもう一人の天才歌人であったことによるといえよう。彼女の思いの切迫性、深さ、重層性に比して、歌の詞はしばしばもどかしくも足りないのだ——さらに豁然と眼をひられる思いをしたのは、空穂の解説であった。たとえば

男の許より、たまさかにてもあはれといふになむ、命は懸けたるといひたるに
 とことはあはれあはれは尽すとも心になふものか命は

という歌がある。男の方からの便りに、たまさかにでも、「あはれ」という言葉をかけてくれることだけを頼りに、生き永らえているのだ、という意味のことをいつてきたわけだが、空穂はこの歌についてこう書いている。

「男の云つて来たのは、我に對してのあはれの少い怨みである。返歌は、式部自身の人生観ともいふべきもので、それとはかかはりのないものである」とことはあはれは尽しても、限りある命のことと飽き足りないといふのである。かうなるとあはれは、大きな宗教家の道に対する心、大きな芸術家の芸術に対する心と拮据（けんく）どころのないものである。式部には恋のあはれは事業だつたのである。」

私は空穂の解説のこういうざっくりと切れ味のいいところに感銘を受けた。このようにして紹介される式部は、一途に生きようとする心が必ずおのれ自身ならびに周囲にまきおこす、錯雑し葛藤する何本もの論理の糸を、強引に歌の中に織りこんで、むしろその複雑さそのものによって抒情の精粹をつくす、得がたい歌人にはかならなかった。私が当時欄外に書きこんだ細かな書きこみには、フランス近代小説への連想が何度か書きとめられていて、この場合にも、私がフランス文学を読むのと同じ次元の出来事として、和泉式部の歌を読んでいたことが明らかである。

つまり私は、自分勝手な読み方によって古典詩の世界への一人旅をはじめていたのである。しかし、そこにはたぶん、もう一つの機縁があった。それについては多くを語る必要はない。加藤周一・中村真一郎・福永武彦三氏の有名な『1946・文学的考察』がすなわちそれである。私はこの本によって、ヴェルギリウスやダンテ、ハックスレーやブルーストを論じると同じ次元で、万葉集や金槐集や源氏物語が論じられ得ることを知った。この認識は、やが

福島市の文知摺石（もじすりいし）。

むかし、この土地の長者の娘が、按察使としてやってきた河原左大臣と契（くわ）り結び、深い仲になった。河原左大臣が都に帰ったあと、娘は、この石の面に慕わしい左大臣のおもかげを見た、という伝説が残っている。

河原左大臣「みちのくのしのおもちずりたれゆゑに乱れんと思ふ我ならなくに」（古今集七二四）。



て大学で国文学科というところに心ならずも籍をおくことになった——仏文学科が第一志望だったのが、不勉強のために国文学科にまわされてやっと合格したのである——私にとつて、少なからぬ心の支えになったように思われる。しかし、さしあたってのところでは、私はたとえばフランス象徴詩を読むのと同じ次元のものとして新古今集を読むことが可能である、という風に、この本との出会いの体験を翻訳したのである。

このことは、ある程度までは有効だった。しかし、それはある程度までにすぎなかっただろう。少し深く突込んで見てゆけば、新古今歌人たちが生きていた、源平の争乱を中心とする貴族階級の没落と無力化、末法の世相、そしてそれに対する死物狂いの拒絶の証しとしての風雅の定立といった出来事は、所詮海の彼方の文学と異った相貌をもっていることは明らかだった。

ほととぎすその神山の旅枕ほのかたらしし空ぞ忘れぬ

式子内親王

この歌は、新古今集すべての歌を通じての絶唱であろう。漂渺たる神韻、というような陳腐な讃めことばは、こういう歌に捧げられてこそ真に生きる。藤原俊成が式子内親王によい歌の本質は、と問われて書いた歌論書、古来風体抄において「歌はただ詠みあげもし詠じもしたるに、何となく艶にもあはれにも聞ゆることのあるるべし」と説いた、その理想の最も徹した表現が、この歌にあるといったらよいかもしれない。なべて新古今集の名歌とされる歌の背後に流れている微妙な調べ、樂園喪失の虚無感の底冷え、そして、とりわけ定家の歌にその結晶的表現を見ることのできるあの、不在のものへの凝視によって現実が逆に反照されるところに詩的焦点を結ぶ幽玄、有心、妖艶美の

伊吹山。岐阜と滋賀の県境にある。

和泉式部「けふも又かくや伊吹のさしもぐささらば我のみもえや渡らん」(新古今集一〇一二)。

京都から志賀へ出る山越えの道「しがの山こえ」。志賀寺まじりの人がよく通った。

貫之「むすぶ手のしづくにこる山の井のあかでも人に別れぬかな」(新古今集四〇四)。

世界は、中世日本の上流階級が生み得た、まことにとらえがたくあえかな、しかしその儚なきのすべてをあけて、現実とよばれる可視の世界に拮抗している言葉の方舟の、竜骨とも軸とも艫ともなっているものだった。そこまで見入ってしまえば、もはやフランス近代の詩との類縁性を歎ぶだけで事が済むようなわけにはゆかない。

式子の今引いた名歌のちに立原道造によって一種の本歌取り *Nachdichtung* の本歌とされたことは、立原の読者なら知っていることだろう。それは今では「ひとつのソネット」と題されて、彼の詩集にのっている。「式子内親王へ」ときすそのかみやまの。による *Nachdichtung*』と副題があるその詩は

ある日 小鳥をきいたとき

私の胸は ときめいた

耳をひたした沈黙のなかに

なんと優しい笑ひ声だ！

にはじまる十四行詩だが、式子の歌の幽暗繊細な面影はない。立原はほかに、定家の「かへるさのものとやひとのながむらん待つ夜ながらのありあけの月へ、大納言実宗の「夢のうちに逢ふと見えつる寝覚こそつれなきよりも袖は濡れけれ」(立原の引用では第四句「はかなきよりも」)などを副題にとった詩を書いており、本歌取りを模したものととしては、ほかに藤原雅経の恋歌「草枕結びさだめむかた知らずならはぬ野辺の夢のかよひ路」に拠った「草まくらむすびさだめむ……」という十四行詩もある(こちらの方が式子内親王に拠った作よりもよい)が、所詮それらは新古今歌人の世界とは異質の、立原道造の詩にはかならなかった。

年も経ぬいのちぎりははつせ山尾の上の鐘のよそのゆふぐれ

藤原定家



京都市・法輪寺。
皇太后宮大夫俊成「浮世にはいまは嵐の山嵐にこれや馴れ行くはじめなるらん」(新古今集七九五)は、俊成が母を亡くしてこの寺にこもった時の歌である。

京都府相楽郡みかの原を流れる泉川(木津川)。
よみ人しらず「都いでてけふみかの原いづみかは川かせさむし衣かせ山」(古今集四〇八、中納言兼輔「みかの原わきて流るる泉川いつみきとてか恋しかるらん」(新古今集九六六))。

この歌は、現代の新古今調歌人の随一、塚本邦雄が賞讃措くあたわさるものとして推賞する歌である。塚本氏はこの歌と、もう一つの定家の歌、拾遺愚草に収める

ふかき夜の花と月とにあかしつつよそにぞ消ゆるはるの缸^{いづは}

とをあげて次のように書いている。

「よそが other place を意味する用例ならば、おそらく枚挙引用に遑もなからう。現実と同次元のあり得るほかの場所すぎないよそならば、それはすでに詩歌のまことの領域ではない。よそが他界を、即ちあり得べき、またはあり得ぬ世界をまで意味し、垣間見させる力をもつまでに深められ、高められた例を、私は少くとも、この二首以外に今日まで見たことはない。ボードレールの謂う、"out of the world". あるいはユー・トビアの語源たる非在の場所と同次元でこの定家のよそはひびきあう。」

塚本氏はこのようにいって、定家の歌の「よそ」が「他界」——これをフランス人はしばしば *l'autre monde* (彼方の世界、あちら側の世界) という言葉で表わしているようだ——を意味していることを強調している。その上で氏はこう付け加えている。

「しかも定家のよそは理想郷でも、ボードレールの『旅への誘ひ』にあらわれる美と贅と楽と静にみだされたところでもなかった。畢竟欣求浄土のその極楽はあだな希いにすぎず、他界も亦修羅であることを、定家は、あるいは彼らは、戦慄と共に予感していたにちがいない。」(「他界の花月」)

ここには一人の現代歌人が、おそらくおのれ自身の「他界」への夢、修羅の生臭い匂いに充ちた壮麗な悪夢を通して理解した中世日本の歌人の世界がある。定家の、これま

た優に新古今集の「しろい」虚無の世界を代表させうる名作、

白妙の袖のわかれに露おちて身にしむいろの秋かぜぞ吹く

をここで思い起すことができよう。有名な三夕の歌も、これらの系としてここに引くことができる。

さびしさはその色としもなかりけりまき立つ山の秋の夕暮 寂蓮法師

心なき身にもあはれは知られけりしぎたつ沢の秋の夕ぐれ 西行法師

見わたせば花も紅葉もなかりけり浦のとまやの秋の夕ぐれ 藤原定家

新古今の歌の哀艶、妖艶、絢爛、微妙その他数々の特質の背景に、没落をすさまじく実感している貴族階級の無常観がどっかと横たわっていたことはまぎれもないことであって、右に引いた数々の歌にうかがわれる虚無の白い風は、新古今集巻末に近い雑歌の部、釈教歌の部に目を注げば、その例を挙げるに事欠かない。

暮れぬめり幾日かをかくて過ぎぬらむ入相の鐘のつくづくとして 和泉式部

世を厭ふ名をだにもさはとどめ置きて数ならぬ身の思出にせむ 西行法師

数ならぬ身を何故に恨みけむとてもかくても過ぐしける世を 大僧正行尊

数ならぬ身はなきものになし果てつ誰が為にかは世をも恨みむ 寂蓮法師

ゆくすゑはわれをもしのぶ人やあらむ昔を思ふ心ならひに 藤原俊成

暮るる間も待つべき世かはあだし野の末葉の露に嵐た

つなり

式子内親王

これらの歌はごく少数の例にすぎない。新古今集で次々に現れるこれらの歌を読んでゆくと、新古今集の類唐美あるいは妖艶美というものが、荒涼たる現世無常の意識の波打ちぎわに、おそろしく濃密に凝縮された美の反撃、その奇蹟的な結晶であったということが、一種肅然たる思いを伴って感じとられるのである。こういう世界が新古今歌人たちの生活意識の基盤にあったことを念頭において読めば、巻二十の釈教歌の、たとえば

いにしへの尾上^{おのへ}の鐘に似たるかな岸うつ浪のあかつきの声
藤原俊成

のごとき名作が立っている岸辺の景趣も、おのずと感得されるであろう。

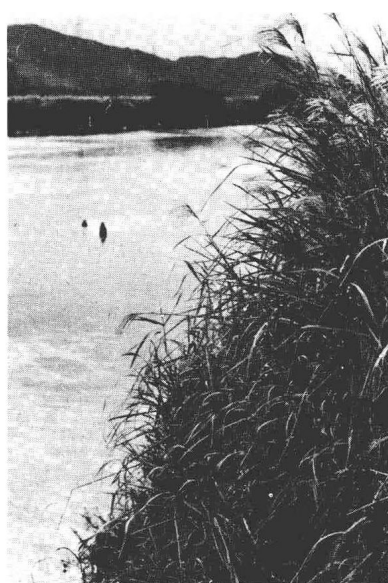
古今集と新古今集とのあいだには、もとより三百年の時のへだたりがあり、古今集から新古今集へと歌が伝えられる間に、後撰、拾遺、後拾遺、金葉、詞花、そして俊成の撰になり、幽玄体をめざすことによって新古今の直接の先



駆となった千載、以上六つの勅撰和歌集が編まれているのであってみれば、その間に多くの変化があったことはいうまでもないのだが、わけてもめざましい古今と新古今との相違をいえば、新古今には、古今にあった俳諧歌の遊びや大歌所御歌、神あそびのうたのごときめでたい歌がなく、あるいは少なくなっていること、仮にめでたかるべき神祇歌の部立てはあるにせよ、そこでの歌の内容は言い様もなく暗いものを持っているということ、そして何よりも、浄土への暗澹たる希求を歌い、ほの見える一筋の光にわが思いを賭けようとする釈教歌が、巻二十の一巻を占め、しかもすでに見た俊成の「いにしへの」のごとき、その歌人の全力を傾注したとおぼしい歌がそこに並んでいるということである。

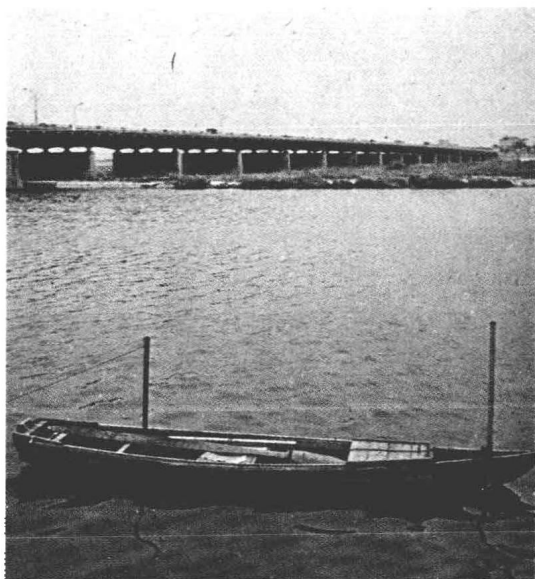
つまり、古今集は新古今集の末世から振り返ってみれば、はるかに大らかで、古拙なのどかさを持っていたということがわかるのである。

私はこの文章を、本来当然そうあるべき、古今から新古



京都市・白川。
平貞文「しらかはの知らずともいはじ底きよみ流れて世々にすまんと思へば」(古今集六六六)。

下は大阪・淀川の葦。
「葦が散る」という枕詞があるように、難波は葦の名所だったが、現在はいすよこれて無残な姿である。
西行法師「津の国の難波の春は夢なれやあしの枯葉に風渡るなり」(新古今集六二五)。



大阪・長柄橋。
恵慶法師「春の日のながらの浜に舟とめていづれか橋ととへどこたへぬ」(新古今集一五九三)、後徳大寺左大臣「朽ちにける長柄の橋をきて見れば葦の枯葉に秋風ぞふく」(同一五九四)。

奈良・佐保山と佐保川。この佐保は、万葉以来の歌枕。
紀友則「たがための錦なればか秋霧のさほの山べをたちかくすらむ」(古今集二六五)。

今への道筋に沿って書くことをしなかった。それは、新古今において一つの絶頂をきわめた和歌の姿を眺めておいてのち、おもむろに古い時代へときかのぼってみることが、現代人たる私たちに許された鑑賞法のひとつとして、興味ぶかくもあれば、新鮮な発見もある方法だろうと思われたからである。そしてそれは、実は私自身がたまたま体験してきた鑑賞の道筋でもあった。私がたとえば紀貫之という古今集の代表歌人に対して、正岡子規流の「貫之は下手な歌よみにて古今集はくだらぬ集に有之候」という勇壮な打撃を加えるだけで足りると思えなくなったのも、新古今から古今へさかのぼる道に見出される和歌の一筋の道に、私流のやり方でやや触れ得た思いがしたからでもあった。

貫之ならびに古今集的世界の特質については、最近小さな本を著したので(日本詩人選『紀貫之』)、できればそれを併せ読んで頂きたいと思う。ただ、和歌の一筋の道と今いったことについていえば、たとえばここに藤原定家の毎月抄があり、その中で定家はこんなことをいっている。

「まづ歌は和国の風にて侍るうへは、先哲のくれぐれ書きおける物にも、やさしく物あはれによむべき事とぞ見え侍るめる。(中略)さてもこの十体の中に、いづれも有心体にすぎて歌の本意と存ずる姿は侍らず。きはめて思えがたう候」とさまかうざまにてはつや／＼つゞけらるべからず。よく／＼心をすまして、その一境に入ふしてこそ稀にもよまるゝ事は侍れ。されば、よろしき歌と申候は、歌ごとに



心のふかきのみぞ申^{まう}ためる。あまりに又ふかく心をいれんとてねぢすぐせば、いりほがの入り歌とて、堅固ならぬ姿の心得られぬは、心なきよりはうたてくみぐるしき事にて侍る。このさかひがゆゑしき大事にて侍る。」

定家がこの引用文冒頭でいっている「先哲」の中には、当然、父俊成も入っていただろうが、遠く紀貫之の古今集仮名序が念頭にあったにちがいないことは、いうまでもあるまい。俊成が「幽玄」を説いたのに対して、定家は「有心」をいう。幽玄は余情静寂を主とし、有心は、和歌十体の一様式としては、やさしく艶なることをもととして、中

世美化された余情妖艶を主としてきしている（久松潜一氏）とされるが、定家はまたこの有心を、和歌十体すべての根源に流れてあるべき「歌の本意」だとし、それを身につけるのは容易なことではないという。「よく／＼心をすまして、その一境に入^いふしてこそ」、稀に詠みうるものだという。そして、「よろしき歌」とは、畢竟「心のふかき」歌なのだ、それが有心の真骨頂なのだというのである。

その上で、彼が、あまりに深く心を入れようとしてひねりすぎると、「いりほがの入り歌」つまり、小ざかしくいじくりすぎたひねくり歌となつて、堅固でない姿となり、納得できない駄作になる、それくらいならむしろ「心なき」歌の方がましである、「このさかひがゆゑしき大事」だといっているのは、きわめて大切な点であらう。

なぜなら、私には、彼の考え方は、作歌の辛酸を嘗めつくした歌人として、深味と苦いアイロニーを多分に含みつつも、なお、古今集の歌人たちがもつと大らかに、あるいは大ざっぱに、考え、言っていたことと、決して別のことを指しているのではないと思われるからである。和歌の一筋の道は、おそらく三百年の迂余曲折を経て、結局「心ふかき」歌を作ること、その恐るべき困難さへの、すぐれた歌人たちが総がかりでの挑戦という形で、確保されたのだというように私にはみえる。それが、源平争乱の戦火と貴族階級没落の地鳴りとに追いたてられるようにして、まさに危機的一瞬に実現したことは、詩歌史上に稀には生じることのある奇蹟的出来事だったというほかない。新古今歌人たちの領袖として、後鳥羽院という秀れた詩人が存在し、その渾身の努力によつてこの詞華集が実現したという事実も、歴史がたまには見せることのある味なほからいだったといつてよいのだろう。

古く時代の有数の女流歌人、小野小町の像（二十六歌仙絵巻より）
「うたたねに恋しき人を見てしより夢てふものは頼みそめてき」（古今集五五三）
「わびぬれば身をうき草の根を絶えてさそふあらばいなんとぞ思ふ」（同五三八）。

秀歌をそっくりとられたのに、歌に思いを残した歌人が、死んだのち、とった人の夢に現れ、「我歌かへせと、なく／＼かなしみけるによりて」勅撰集からその歌を削除したなどということが、毎月抄には書かれている。そういう狂気が歌壇にみちていたのである。そういう狂気の中で、定家は「常に心ある体の歌を御心にかけてあそばし候べく候。但、すべて此体のよまれぬ時の侍也。蒙氣として心底みだりがはしき折は、いかにもよまんと案ずれども、有心体出来ず。それをよまん／＼としのき侍れば、いよいよ性骨もよわりて無_三正体_三事侍也」云々とのべているのである。狂気をさらに上回る、すさまじい明晰、冷徹の炎が、そこには燃えていた。

さて、すでにこの文章にあてられた紙数は尽きようとしている。古今集について書く余裕がなくなったことをお詫びしなければならぬ。私としては、この文章の冒頭部分で書いたごく個人的な経験の思い出と帳尻を合わせるため、ここでも少々型からはずれたことを書きしるしてしめくくりとしたい。

古今集は、実は最初から順に読んでゆくとどうも退屈しかねない集である。読者の多くは、たぶん古今集という集について、万葉集の単刀直入、赤裸な生命感の流出、健やかなますらおぶり、思いの直叙等々の美質に対し、理知的で纖巧でたおやめぶりで感動の直叙に乏しく野性味にもまた欠けた堂上貴族の遊蕩的な歌集、といった数々のマイナスポイントを負わされた集——という先入観を、少なくともぼんやりとは、もっているのではなからうか。そういう先入観をもって読むならば、古今集の面白さに触れることは、おそらく非常にむづかしいだろう。わけても、古今集をその冒頭、春歌上の巻から馬鹿正直にお読みになる場合には、

その先入観がいちいち歌によって確かめられるような気がして、とても先の方まで読み進むことはむづかしくなるだろう。子規が罵倒した貫之の

袖ひちてむすびし水のこほれるを春たつけふの風やとくらむ

のような歌が、さもなければ明らかに示しはじめるいくつかの見どころも、こうしてあなたの前から閉ざされてしまうことになるだろう。

私は古今集についての先入観を捨てて読むことを、何よりもまず読者にすすめたい。しかし、そうはいっても、それは大層むづかしいだろう。そこで私は、これから古今集を読もうという読者には、巻十一から十五までの恋の歌からまず読んでみたらどうか、といいたい。とくに、巻十一。大部分は「読み人しらず」、つまり作者名不明の歌だから、古今集所載歌としては年代的にやや古い、つまり万葉集の方にむかって古い歌とみてよい。中には、当時一般に愛誦されていた流行歌も含まれているだろう。この巻の歌から古今集に入っていくって、業平や小町の歌を読み、貫之、友則、躬恒、忠岑ら撰者たちの歌に接してゆくということが、ひとつの読み方として考えられてよいだろう。

ほととぎすなくやさ月のあやめぐさあやめもしらぬこひもするかな

巻十一巻頭の歌、読み人しらず。

ゆふぐれば雲のはたてに物ぞ思ふあまつそらなる人をこふとて

同じく読み人しらず。

これらにまじって、壬生忠岑の名歌
かすが野の雪まをわけておひいでくる草のはつかにみえしきみはも